



も い 以って瞑すべし

—近代産業国家の設計図面を引いた男—

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

過日、群馬県に小旅行した。高崎郊外の榑田村にある東善寺というお寺で、村上泰賢と仰る住職にお会いした。お寺の境内を拝見し、庫裏に並べてあった資料の幾つかを買い求めたところ、「それは私の書いたもの」と云って、署名をしていただいた。

その間、色々お話をするうち、「政府は、富岡製糸場については世界遺産だと云ってもて囃すが、殖産興業のシンボルとしては製糸場は妹分に過ぎず、その兄貴やその弟分ともいえる施設・功勞者については、未だに正当な評価をなしていない」という氏の言葉が心に残った。明治以降、新政府を担った薩長の藩閥勢力が事物の評価に当たり、「勝者の史観」で彼らに都合の良い恣意や裁量を加えることがあったにせよ、それにしても「殖産興業のシンボルとしての製糸場の兄貴とその弟分」と云うのは何のことだろうか。

本稿は、かつて産業振興に携わった者の端くれとして、当局から継子扱い(?)されてきた「兄貴とその弟分」、就中、兄貴とその育ての親に、多少なりとも真つ当な光を当ててみようとする小論である。

司馬遼太郎の晩年のシリーズ「街道をゆく」の最後から2番目は「三浦半島記」である。その中に、「三浦半島の一漁村にすぎなかった横須賀にフランスのツーロン軍港を範とする一大艦船製造所を興した……(中略)……この造船所が、日本の近代工業の

いっさいの源泉になった。」「……地図を見ると、屈曲が横須賀港において最も魅力的で……(中略)……平安後期、その自然地理が三浦党を成立させたように、幕末、製鉄、造船の設備ができ、明治後軍港になり、いわば近代の大水軍の根拠地になった。」という段がある。また、江戸から横須賀への道を辿る幕臣小栗上野介忠順が、目途の付いたその地の製鉄、造船の設備について、親友で外国方の栗本瀬兵衛安芸守¹⁾に向かって、「これで、たとえ(幕府が)売り家になっても、蔵つきになる²⁾」と明るく語りかけたというエピソードを紹介している。



↑栗本鋤雲像(東善寺小栗象の近くに、小栗を横から支えるような角度で建っている。)

←東善寺の小栗上野介像

- 1) 栗本瀬兵衛は、小栗とは幼馴染(おさななじみ)。函館奉行所組頭、外国奉行などを歴任し、パリ万博のために訪仏中に大政奉還を知る。維新後は仕官に应ぜず、ジャーナリストの道を歩み、郵便報知新聞主筆を務めた。欧州アルプスに登山した初めての日本人と言われている。栗本鋤雲(じょうん)と称した。
- 2) 同じ趣旨で「同じ売据(うりすえ)でも土蔵付き売据がいい」という表現での言葉も残っている。売据とは、家具付きの売り家のこと。のちに明治政府がいわば「居ぬき」で江戸幕府の資産、蓄積を引き継いで国家建設に当たったが、まだ江戸城の無血開城はおろか時節の行方も定まらない時期に、幕臣でありながら、幕府の命運への予感を滲(にじ)ませ、ポスト幕府の世への遺産創造にかける思いを込めた小栗の言葉には心打たれる。

ことは横須賀から始まる。

現在、海上自衛隊横須賀基地・自衛艦隊司令部と在日米海軍司令部・艦隊基地のある横須賀は、幕末までほとんど何もない寒漁村であった。黒船がやってきた浦賀は半島のもっと先である。この地が脚光を浴びるようになったのは、幕府によって我が国初の製鉄所、造船所を造ることが構想されてからである。当時、複雑な対外政治情勢の中で幕府と誼を通じたフランス政府から派遣された若き技術者フランソワ・レオンス・ヴェルニーは、横須賀を海上から眺めて「故郷ツーロン港に似ている」として、この地の港湾としての適性を一目で見抜いた。仏公使のロッシュに依頼して³⁾、当時香港から任期明けで母国に帰らんとしていた

彼を呼び寄せたのは、時の勘定奉行小栗上野介。招かれたヴェルニーは、時に弱冠29歳。あまりの若さを訝る向きもあったが、その技量は確かで、技術的良心に富んだものであった。後発国の日本としては折角導入するなら「最新鋭の設備」と思うのは自然であった。しかし、ヴェルニーは「確かに効率は新しいものがい



ヴェルニー肖像(ヴェルニー記念館パンフレットより)

いかかもしれない。しかし、機器は使いこなすことが大事。実際の稼働の実証が果たされた機器の方が確実だし、いざという時の修理の勝手やあとの創意工夫の便も良い」として、日本の「身の丈」に鑑み、堅実な技術の導入を奨めている。こうした姿勢は実務家上野介をはじめ心ある幕臣の琴線に触れるものであった。しかもそうして導入した設備は、のちに述べるように、最近時まで現役であった訳だから、決して易いレベルのものではなかった。また、ヴェルニーは仏国から連れてくる技術者の人選においても、「既に官営工場その他で3年以上の実績があり、人種的偏見がなく、異国での長期間の滞在を考えて

妻帯者が望ましい」として、若いにも拘らず労務上の配慮もしている。彼自身も夫人を伴っている。彼有能力、更には明朗公正な人柄に惚れ込んだ小栗は、家族ぐるみの関係を築いて彼を支援し、協働した。マリー夫人と小栗夫人道子も大層打ち解けた行き来をしたと伝えられている。

小栗が横須賀の地に製鉄・造船所を造ろうとした契機は、彼が米国との条約批准のための使節に随行した折の米国での見聞にある。1860年(安政7年/万延元年)に幕府は日米修好通商条約(1858年調印)の批准書を交すため、新見豊前守正興を首席、村垣淡路守範正を次席として、総勢70余名の使節を派遣した。乗船は米艦ポーハタン号。小栗は目付(監察)という身分での参加で形式上三席ではあったが、条約交渉時に詰警護役として外国人と接した経験や資質・能力の高さにおいて、使節団では唯一かつ随一のプレーヤーであり、事実上の首席であった⁴⁾。行く先々で米国関係筋とのやり取り、各種インタビューなどへの対応は、彼が一手に受けもった。



幕府使節団首脳(左から、副使村垣淡路守範正、正使新見豊前守正興、目付小栗豊後守忠順。小栗は当時豊後守と称していた)

- 3) 当時の国際情勢は微妙で、幕府としては当初米国に助力を求めようとする意向もあったが、米国は南北戦争で余裕がなく、結果的に仏国からの技術者招聘となった。その折、公使のロッシュと小栗を結びつけたのは、ロッシュの通訳をしていたカションと親しかった栗本瀬兵衛(鋤雲)である。なお、仏側が積極的にこれに応じた背景には「日本産の生糸貿易拡大」への思惑があった。
- 4) 当時の外交使節の人選については、外国人に対して気遣い・位負けしない堂々とした「見た目・押し出し」が重視された。写真にあるように、首席、次席ともその基準には適っているように見受けられる。但し、それだけでは内容を伴う会話と受け答えに耐えられるはずはなく、しっかりコミュニケーションできる小栗が米国から専ら相手にされたのは、至極当然であった。



その訪問先の一つにワシントン海軍工廠^{かいぐんこうしょう}があった。写真は訪問時の日米関係者の集合記念写真である⁵⁾。そこで彼が目にしたのは、「鉄の国」の実力と製鉄と金属加工における彼我の圧倒的な技術格差であった。既に普及の時期を迎えていた蒸気機関の迫力に瞠目^{どうもく}するとともに、船や武具の装具品をはじめ、船のロープや帆はもちろん螺旋、釘やドアノブに至るまで、多様な品物を工廠の現場において自前で製造している姿に地力の差を痛感した。

一行は批准書交換、ブキャノン大統領表敬接見を済ませ、各地視察のあと帰路大西洋に出て、喜望峰、インド洋、南シナ海、香港経由で世界を一周する形で、9か月後に帰国した。一行が米国に出発した際の大老は井伊直弼。小栗は彼に抜擢されて使節団に加わり、貴重な経験を積んだのであるが、留守中に国内政治は一変。井伊直弼が桜田門外で水戸藩士に暗殺^{わがものがお}され、帰国した彼らを迎えたのは攘夷派の跋扈であった。とても海外見聞を披歴するような雰囲気

ではなかった。一行には首を竦めて過ごすような日々であったが、一人小栗だけは臆することなく、海外で目にした文物の優れた点を開陳し、政治、経済、文化において欧米を模範とするべきとの開国論を堂々と展開したという（「幕末の政治家」福地源一郎（桜痴））。

小栗が製鉄所、造船所の建設建白書を提出したのは1863年（文久3年）のこと。当然、異論が噴出した。「そんな大層^{たいそう}なものを造る余裕がどこにある。それに現下の情勢では、時間がかかって、それができる前に幕府がどうかなってしまいかねない。」

勝海舟こと勝安房守ですら、その口であった。費用積算は240万ドル（＝大凡60万両相当）。建設見込み期間4年。当時の幕府の直轄領の石高その他の収入はあわせて150－200万両／年。ただでさえ物入りの折、決して安い追加負担ではない。だが、小栗の存念は明解であり、痛快ですらあった。「幕府の命運には限りがあるかもしれないが、日本の命運には限りはない。今、幕府のしたことが長く日本の



米国海軍工廠訪問時の一行（東善寺資料 前列右から2番目が小栗。後列右から7番目が受け入れ側トップのブキャナン提督。）

5) ところで、写真の中に、使節と一緒に咸臨丸で太平洋を渡ったはずの勝海舟の姿がない。彼は、我が国の代表が米国水夫操船の米国船で赴くことを潔しとせず、木村撰津守喜穀（よしたけ）を頭にいただき、自ら艦長格となり、日本人水兵を主とした陣容で太平洋に漕ぎ出している。「その意気や佳し！」である。使節団一行の護衛という名目ののに何故か一行に先駆けて出航している。しかしながら、日本水夫の技量は太平洋の荒波を御するには到底覚束なく、馬鹿にして「念のため乗せておく」とした米国水兵による操船にほぼ全面的に依存した。勝海舟とは云えば、渡航中船酔いが酷く、ほとんど自室から出てこれなかったとされている。咸臨丸はオランダから購入した幕府船で、日本人の手による太平洋初渡海として喧伝されているが、その実態はかくのごとであった。東善寺の村上和尚が「教科書には咸臨丸の写真を載せるのではなく、（近代日本建設への影響を考えれば）ワシントンの海軍工廠を訪れた小栗たち一行の写真をこそ載せるべき」と言われるのに共感するところがある。なお、咸臨丸には、ジョン万次郎、福沢諭吉らが同船している。

ためになれば、国の利益である⁶⁾。」

ここには彼の幕臣としての立場を超えたいわば上質の「日本国官僚」としての矜持^{きやうじ}ともいべき意気^{いげ}の迸り^{ほとばし}を感じる。無論、当時の彼において「日本国」という国家観がどのようなものであったのかは分からないが、条約使節として外の世界に接したゆえに、「吏僚^{りりょう}（国の司）として今なすべき使命の認識と設定すべき土俵^{フィールド}設定」の感覚は卓越している。

幕閣における紆余曲折の検討の末、1864年老中水野忠清、阿部正外、諏訪忠誠らによって製鉄所、造船所建設が遂に裁可され、翌1865年（慶応元年）から建設が開始されている。ただ、決定に至るまで反対論が根強く、決定後もなお不満が燦^{くすぶ}ることに鑑み、反対派の機先を制するために、小栗はその決定

とともに自ら奉行の職を辞している⁷⁾。もっとも、建設委員には残り、実質の推進役は果たし続けた。

ここで「製鉄所」と述べたが、それは通常のイメージとは異なる。Arsenalという語があてられたが、鉄鉱石を製煉して鉄を作るのではなく、銑鉄に加工を施して、ボイラー、パイプ、釘、螺旋、大砲などを製作する「総合加工工場」というようなものである。まさにワシントンで見えてきた海軍工廠に近いものであった。鉄鉱石については、新たに上州の鉾^ほ脈からのものを用い、石炭不足のために主に木炭による高炉運営を行った。

ここでは、むしろ機械工作が重要。その象徴的な器具が、スチームハンマー。オランダ製の3トンス



横須賀製鉄所鳥瞰図（東善寺で買い求めた「日本近代化の源泉・横須賀造船所」より）

6) 勘定奉行だからと言って、これだけの費用を捻出するのはたやすいことではなかった。「むしろ、これくらいの支出があった方が、他の凡費を節約させやすい」というのは彼特有の言辞（ものい）であるにしろ、実際には万延二分金の増鑄による発行差益出しなどを工夫している。当時の為替価値との比較は、後述するようにまさに対外折衝で変更を目指すような事情があり実際の推計には難しさがあるが、ここでは金一兩が一分銀四枚相当で四ドルに変換可能とし、米一升が100文（1/40兩）として計算した。

ただ、240万ドルという価格は、当時幕府が外国から買っていた武器などのべらぼうな価格相場に照らしてみると「格安」なものにも思える。価格交渉経緯をみると、仏側からもっと高額を提示を覚悟していた様子が窺える。

7) その時の小栗は軍艦奉行であった。彼の官職は実のところ変わっている。事務方の書院番、使番や勘定奉行、外国奉行をしたかと思うと、軍艦奉行、歩兵奉行、陸軍奉行、海軍奉行、講武所御用取扱など武ばった役職をもこなし、更には江戸南町奉行すら歴任している。いわば今でいうと（やや乱暴な比喩だが）、官房副長官、外務大臣、財務大臣、防衛大臣などに加え、東京都知事もこなすというオールマイティ・プレーヤーぶりである。信念を曲げず、人並みの我慢（現実的妥協）ということをしないうで、提言が受け入れられず上司と衝突する度に辞職してしまうのは、吏僚としては如何なものかとは思うが、辞めてもやめても次の声がかかったのは、人材不足もあったであろうが、余人に替えがたい彼の卓越したる力量のなすところであった。



チームハンマーは、あらゆる工具、部品を鍛造し、船の製造に必要なものを造りだした。スチームハンマーをはじめ全ての機械工作やドッグの操作などは、蒸気機関を動力とした。オランダから輸入され、横須賀の製鉄所、造船所を支えたこのスチームハンマーは、実に1997年(平成9年)まで現役で稼働し、現在ヴェルニー記念館に展示されている。また、ドライドッグは、今なお米軍基地の中で健在である。

なお、冒頭、横須賀製鉄所と富岡製鉄場とは兄妹と述べた。どちらも蒸気機関を活用し高い煙突が特徴であるが、目立たないものの蒸気の元になる水を溜める水槽にも注目。下の写真は富岡製鉄場内に今も残る鉄水槽である。横須賀製鉄所で製作されたもので、防水効果に優れたリベット打ちの先駆的なもの。



ヴェルニー記念館(横須賀市)



スチームハンマー刻印



スチームハンマー(ヴェルニー記念館)



鉄水槽(富岡市 富岡製鉄場 鉄水槽全景とリベット打ち)

小栗は、近代設備のハードだけでなく、労務政策、教育制度でも先見的な仕組みを実践している。横須賀造船所において、工事の開始当初は仏人技術者だけに適用していた日曜休日を日本人職人にも広げ、有給休暇制度、年功給与制、更には健康診断も実施した。従業員教育についても、職場内学校として職工向けの「^{こうし}覺舎」、上級技術者向けの「機関学校」を設けた。

米国の息吹に接し啓発された彼が、製鉄所、造船所の建設・運営だけでなく着手、実行した事案はほかにも沢山ある。

まず、ほとんど注目されていないが、外交使節としての任務の一つに通貨折衝があった。小栗は米国滞在中、フィラデルフィア金貨製造所(造幣局)を訪問している。小栗は出発前に井伊大老から「批准書交換と併せて、目下問題となっていた金貨小判の流出を阻止するための対策を米国で講じてくるよう」指示を受けていた。当時、金銀の内外交換比率差に起因する通貨交換レート¹⁾の不利により金の流出が起きており、その是正のための交渉は国家として喫緊の課題であった。但し、使節団にはレート変更の交渉マ²⁾ンデットまでは与えられておらず、いわば来たるべき交渉の下調べとして実地の調査を命じられていたのである⁸⁾。彼は、造幣局で小判とドル金貨に含まれる金、銀などの組成を、目の前で実地に溶融^{いぶか}して検証することを要求した。当初はその意図を訝り、意図が分かってからは渋る造幣局側を向こうに回し、粘り強くかつ論理的に折衝し、実測を通して問題点の抽出と結果の是認を勝ち取っている。実地の検証が終わった後、米国側も小栗の態度、思考ぶりを称賛し、わざわざ歓送会まで催してくれたという。

先に、製鉄所の建設に際して鉄鉱石供給のことに触れたが、小栗は輸入に頼らない自前の鉱山開発を進めるべく、上州小幡藩内の中小坂鉄山^{なかおさかてつざん}を有望とみて、幕府の責任でその開発に着手している。また、大砲鑄造の事務責任者をも兼務し、当時あった効率

8) 当時の交換レートの問題は、大雑把に言えば当常用されていたメキシコ銀貨を巡る内外交換比率のアンバランスにあった。通貨の交換レートの変更交渉が大切と言っても、含有金属の実態把握が不足しており、また、当時の我が国での米国代表で政治経済の折衝キーパーソンはハリスであり、彼の頭越しに本国との交渉を進めることには拙速感、政治的抵抗感があった。当時の勘定組頭などが使節団への交渉授権に慎重な立場をとった。なお、ハリスらがこの間この問題を長引かせ、私腹を肥やしたとの芳しからざる説がある。

の悪い湯島、関口の鋳造所に替えて、滝野川に反射炉による大砲鋳造所を建設した。これには、玉川から千川用水への用水権の調整など難しい問題があったが、作事奉行との折衝を経て見事に調整しきった。滝野川にはその後、火薬製造所も建設され、一帯が明治以降も重要な工業地域となる礎^{いしづえ}となった。

小栗の功績は、仏国との協働という意味では、更に陸軍制度改革、仏語教育にも及んでいる。ロッシュ公使の伝手^{つて}で、仏国から軍事顧問団の派遣を得て、駒場で組織的な伝習がなされた。のちに函館まで抵抗戦を戦うことになる大鳥圭介や三井物産の祖となる益田孝らはここの伝習生である⁹⁾。また、製鉄・造船所、陸軍が仏国の流儀でいくならばと、仏語の全寮制伝習所を横浜に開設した。盟友栗本が総監督を務め、授業は英語をも含み、歴史、地理、数学、馬術にまで及んでいた。小栗、栗本の養息子など多くの若者がここで学んだ。学校は幕府倒壊後は明治政府に受け継がれ、最終的には陸軍の中央幼年学校となっている。

更にさらに、実は我が国初の株式会社も設立している。安政五か国通商条約で開港が約束されていた兵庫港での貿易については、それまでの長崎、横浜での彼我の取引実態を教訓にしている。即ち、「外国資本に対して小規模で取引ポジションに弱みのある我が国商人」の立場を改善すべく、我が国商人を組合組織に束ね、全体として外国商人に当たらせるという企画をしている。これによってできたのが「兵庫商社」。1867年、京都と大阪の富豪20名から出資を募り、結社させ、役員・定款を定めた。そして、ゆくゆくはその利益で、ガス灯、郵便電信制度、鉄道などを整備することを構想している。また、東京築地の初めての洋風ホテル「築地ホテル」も株主会社方式をとった。小栗は勘定奉行としてこれを指揮した。用地は外国人居留地で、これを無償で貸すから、あとは民間の資金で建物を造り、収益は出資者が取って良いとする画期的な方式であった。「株式

会社」という着想は、使節団がパナマ運河訪問で乗った鉄道が、出資(株式)という形で民間資金を集めて運営されていることに啓蒙^{けいもう}されたことに発している¹⁰⁾。

これらのどれもが我が国近代化の重要な要素であるが、その紹介に小栗上野介の名はまず登場しない¹¹⁾。

話を時局に移そう。

大政奉還、鳥羽伏見の戦(戊辰の役)を経て、慶喜恭順、江戸開城、更には彰義隊の上野立籠^{たてこ}もり、東北列藩同盟、函館戦争に至る一連の維新騒乱の経緯をなぞることは本稿の主題ではない。ここでは、大政奉還の狙い、そしてその後の小栗上野介の運命を一変させた経緯^{いきさつ}について記しておきたい。

大政奉還(1867年)については、教科書的には、「時局の趨勢に抗しがたしと判断した15代将軍徳川慶喜は、遂に政権を朝廷にお返し(大政奉還)することとし、薩長土肥の一つ土佐の山内容堂の意を受けた同家の後藤正二郎の建白を受け入れる形で、その旨二条城に於いて宣言した」というように理解されている。しかし、慶喜の政治判断はそのような受動的なものではなく、むしろ攻勢的な意味を含んでいた。真の狙いは、まず先手を打っていち早く大政奉還を断行し、それによって討幕軍の大義名分を奪うこと。そして、倒幕勢力の国全体の治政能力の限界を見越して、幕府は解体するものの、その実は大名の代表によって構成され彼を議長(大君)とする公議政体にすりかえて、主導権を握ることにあった。その着想自体は一つの大局判断として、あり得るもののひとつであったかもしれない。こうした目論見^{もくろみ}は、並行して進められた幕府軍の軍制と軍備の近代化と併せて立体的に構想されたはずであった。実際、政事総裁職の地位にあった松平慶永など「殿さま仲間」には賛同する向きもあった。しかし、密かに真意を打ち明けられた幕閣(老中板倉勝静ら)では「果たして現実はそのなにより上手く運ぶであろうか。一旦実権を手放したが最後、取り返しがつかない」との

9) 後に鳥羽伏見の戦(内戦)が始まると、伝習教官として派遣された仏国軍人は、国際慣行に即し伝習所を離れて中立を保った。しかし、一部の仏人教官は東北から函館まで幕府軍に同行し、共に戦ったという記録がある。

10) 画期的な「株式会社」の先駆ではあったが、残念ながら、兵庫商社は幕府倒壊の中で、十分な活動することなく解散を余儀なくされた。また、「築地ホテル」も築地の大火で焼失してしまった。

11) きりがないので本稿では触れないが、彼の視線の先は、郡県制の設計、鉱山開発などの絡みでの環境への配慮など、多岐に及んでいる。



きぐ ぎさや 危惧が囁かれるほどに「具現の仕掛けは甘かった」。そしてなにより、大プラン成就のためにも、果敢な実行使とその姿勢を示すことを期待された慶喜自身には、朝廷尊崇という思想的呪縛要素があった。

1868年1月、慶喜は、鳥羽・伏見の戦場から何故か味方を置き去りにし、戦わずして突如江戸に舞い戻った。彼を囲んでの江戸城評定は沸騰した。小栗は、大鳥圭介、榎本武揚らとともに、此処を先途に¹²⁾徹底抗戦を主張した。陸上兵力だけでなく、ほとんど無傷の海上戦力の優位を説いて、箱根における倒幕軍の挟撃殲滅作戦¹³⁾を具体に提案した。

しかし、「朝廷から賊として追討・追捕」されるような立場に置かれることを徹底して懼れる慶喜は、注進された「密勅下る」の報に怖き、遂に戦頭に立つことを肯首^{おのの}げえなかった。評定のさなか、將軍の袖に取り縋るまでして翻意を乞う小栗に浴びせられたのは、「無礼者！」との將軍からの叱責であった。

慶喜への直言、諫言^{かんげん}を入れられず、老中酒井忠惇^{ただあつ}から最後のお役御免を沙汰された彼は、1月末に「土着願¹⁴⁾」を出して、自らの所領のうち最も大きな権田村に一族で移り住む決心をする。早々に荷物を纏めて村に入り、東善寺に一時的に寄寓。その間、彼の主戦論の立場を慕って上野の彰義隊からも、またのちに函館まで戦い



旧東善寺（東善寺資料より）

抜いた榎本武揚からも抵抗戦への参加を誘われたりもしたが、「自分の仕事は成し遂げた。上様が闘わないと仰るのに、旗本が戦うわけにはいかない」として、全くこれらに応ずることはなかった¹⁵⁾。

田舎に落ち着いて将来の人材教育などをして余生を過ごすつもりであったが、情勢は彼にそれを許してはくれなかった。慶応4年(1868年)閏4月、彼は、東上した倒幕軍のうち東山道総督に随行した上野国巡察師兼軍監の原保太郎¹⁶⁾らによって、突如捕縛される。そして、主だった郎党¹⁷⁾とともに、烏川の水

小栗上野介忠順の墓（東善寺）
斬首された上野介の遺体（胴体）はこの地に埋葬された。首級は首実検に館林に送られ同地の法輪寺に葬られていたものを、一周忌を期して中島三作衛門関係者が首級を「(盗掘)奪取」し、この地に戻した(首級還り(おくびかえり))。
右が元からの墓で、その横に一緒に処刑された家臣三名の墓が並んでいる。近くに、小栗の愛した椿の木がある。右下が父子の首級を後に葬った墓で、元の墓から少し山を登った処にある。



- 12) 慶喜は幕臣にとっては待望のエースであった。「家康公の再来」とまで言われ、矢継ぎ早の対応手腕には多くの期待が寄せられた。しかし、ここ一番の処で不可解な言動を繰り返し、江戸城での評定こそは、決定的で最後の「殿、ご決断！」を迫る場となった。
- 13) 小栗が提案した「倒幕軍の挟撃殲滅策」とは、「東海道を進む主力の官軍を箱根関内に入った処で幕府陸軍が迎撃し、同時に榎本武揚の率いる海上艦隊が駿河湾から艦砲射撃で後続部隊を足止めして、孤立化させた箱根の主力を殲滅する」というもの。のちにこの作戦を聞いた大村益次郎は、「仮にその策が採用されていれば、今頃我々の首はなかったであろう」と震撼したとされる。
- 14) 土着願と併せて、小栗は「采地(領地)返上」をも申し出ている。さすがに「そこまでには及ばない」とされて土着だけが許されたが、譜代の家禄2千数百石を自ら返納するというところに彼の決意のほどが感じられる。
- 15) 慶喜の袖に縋ってまで抵抗を主張した小栗の主義とそのあとの土着隠遁との落差については、解説が必要であろう。「主家の旗の本」を守る旗本たる彼にとって、どんなに不利と判っていても、主君が闘うと云えば闘うのが当然。しかも保持する戦力の少なからざるを認識していればなおさらである。他方、好むと好まざるに拘らず主君が闘わないと決め、自らはその主君から罷免され、もはや守るべき旗がない以上、その闘い加わるのには大義名分が立たないとする立場である。これを、身分・職責がすべてで朱子学の影響から抜けでていない「吏僚の限界」とみるか、「精一杯やったあとの割り切り」とみるかは、見解が分かれるかもしれない。
- 16) 原保太郎は園部藩士。後に山口県知事、福島県知事を経て貴族院議員を務めている。剣客であり、小栗を自ら処刑したと吹聴していたとの伝もあるが、さすがに一軍の将であり、それはなかろう。ただ、のちに横須賀の造船所を見て仰天したと伝えられている。その胸中や如何に。
- 17) この時一緒に斬首されたのは、家臣の荒川祐藏、大井磯十郎、渡辺太郎。彼らはフランス式の訓練を受け、語学にも秀でた有為の人材であった。養息子の忠道も仏語の通訳ができるほどの逸材であったが、事情釈明のために先に倒幕陣営に向かったところを拘留され、上野介処刑の翌日に高崎城内において斬首された。



しかし、見逃してはいけないより肝心なことは、当時及びそのあとに流布した「お上は正統的に絶対であり、その判断は間違っていないはず」という特有のニューマ（空気）の存在である。これこそが、彼の不幸な最期の顛末とは別に、その後の彼の評価に深く係わり、それを著しく歪んだものにした。判断する立場の討幕勢力にとっては、彼の業績、存在は「構造的に許せないもの」であったのである……。

これには微妙（陰湿）な時代感覚を理解する必要がある。江戸期から明治期への移行の革命的政変は、さすがに「時代の趨勢に適う尊王攘夷の薩長が、陋習姑息で開国論の幕府勢力を圧倒して、大政奉還・江戸無血開城を達成した」というようなナイーブなものではない。薩長新政府は政権奪後さっさと開国路線に切り替えしたし、そもそも徳川慶喜は尊王思想の本家（？）水戸の出身である。それに何より朝廷は慶喜からの大政奉還の申し出を「即刻勅許」しており、故に既に存在しない幕府を倒す（倒幕）という名分はどうやっても立たない状況にあった。であるにも拘らず、いやむしろそうした実態であったからこそ、その矛盾を隠蔽するためにも、偽装した倒幕の密勅（偽勅）や俄か作りの「錦の御旗」まで動員して、ヘゲモニーの正統性確保に血道を上げた。このあたりの物語は本稿の本題ではないが、大事なことは、倒幕勢力は倒幕戦争の最中ではもとより、勝者となった爾後においても、その正統性の危うさを徹底して糊塗・払拭しなければならなかったということである。そのために、江戸期の価値、業績を誤ったものとして否定するか、無視せんとする強い心理が働いた。その意味で、小栗の業績は立派であればあるほど、それを認めたくなかったのである。その限りにおいて、彼らによる公式の言説体系には偏向がある。

……、ここで少し時間を飛ばしてみる。

日露の日本海海戦から随分月日が経った明治45年（1912年）のある日、連合艦隊司令官であった東郷平八郎は、小栗の遺族を自宅に招いた。招かれたのは小栗貞雄。彼は、大隈重信のブレーンで政治

家・ジャーナリストであった矢野龍溪の弟で、小栗上野介の遺子国子の夫として小栗家を継いでいた。平八郎は貞雄に向かって、「海戦に勝てたのは上野介殿が横須賀に造船所を作ってくれたお蔭である」と頭を垂れた。

これには若干の解説が要る。さすがに戦闘主力で「東郷ターン」の立役者である戦艦、巡洋艦は悉く外国製である。横須賀で造ることができたのは特務艦、水雷艦などの小規模艦艇だけ。しかし、対馬沖での「伸か反るか」の大海戦は、バルチック艦隊の「殲滅」が至上課題であった。勝てばよいというものではなかった。出合いがしらの遭遇から敵前回頭し並走して撃ち合うにしる、それだけなら勝負はほぼ「ワンチャンス」。戦闘で隊列が乱れた後、「撃ち漏らしのロシア艦船」がウラジオストックに逃げ込み港内の東洋艦隊と合体すれば、その脅威は計り知れなかった。その時、水雷艇などの動きの良い小船艇が、ロシア船に肉薄し魚雷を至近距離から発射して確実に仕留めていった功績は、まさに殊勲甲であった²⁰⁾。平八郎はこの意義を十分に理解していた。また、ドッグの船台を活用して、外国から買った大型艦船をも含め整備十分で戦いに臨むことができたのも、造船所の立派な効能であった。欧州から、恐らく船底に貝殻を一杯溜めて機動性を損じながら長駆日本海に辿り着いたロシア艦隊とは、「戦う前の備え」の差が歴然としていた。

平八郎はお礼の意味を込めて扁額を贈っている。平八郎は当初、扁額の「為書」を貞雄宛てにしよう



東郷平八郎筆扁額（東善寺）

20) この時の日露の艦艇ラインナップを見るに、大口径の砲を持つ戦艦とそれに準じる装甲巡洋艦だけに限ると、互いに12隻で差はない。しかし、駆逐艦、水雷艇など小艦を加えると、99隻（日本）対39隻（露）と相当な差が見て取れる。この小艦の活躍が勝敗を分けたのは本文の通りであるし、横須賀のほか近海に佐世保、釜山に港を有し、訓練と整備を重ねて待ち構えた日本艦隊との差は歴然としていた。更に、「皇国の興廢この一戦にあり」とする日本艦隊と、本國で革命の機運が高まるなか貴族の仕官と庶民の水兵との衝突などを繰り返しながら対馬沖に辿り着いたロシア艦隊とでは、士気の違いも大きかった。

としたが、貞雄は「自分は婿養子で小栗家に入った身。上野介の血を引く国子の息子が名乗っている又一宛てにしてほしい²¹⁾。」と頼んでいる。写真がその扁額である。「仁義禮智信」とあり、東善寺の本堂に掲げてある。

小栗上野介の再評価・名誉回復には時間がかかっている。東郷平八郎の謝辞は海戦から7年も後のことであり、律儀な彼の私的な行為でしかない。公の「名誉回復」は、大正4年(1915年)の海軍工廠創立50周年における時の総理大臣大隈重信による顕彰辞(代読)が最初ではなかろうか。その席には、「小栗上野介末路事蹟」という地元の文筆家の手による纏まった資料も配布された。大隈は常々「明治政府の近代化政策は小栗忠順の模倣に過ぎない」と語っている。彼はその妻綾子が上野介の^{いとこ}従妹であり、親族である立場を割り引くとしても、時流の先取りをして果敢に行動した上野介の姿勢に、政治家として大いに感ずるものがあつたのであろう。しかし、一般にはなかなか上野介の事蹟は人口に膾炙せず、最期を遂げた地元^{じんこう}に顕彰碑を建てるのにさえも、60余年の年月を要した^{かいしや}²²⁾。二人の胸像がある横須賀の記念公園は、「ヴェルニー公園」であって「小栗公園」ではないし、そこでの二人の功績を顕彰する祭事は、昭和50年代初めから続くものの、その名称に漸くにして小栗の名を追加し「ヴェルニー小栗祭り」となったのは、平成8年(1996年)のことである。

これだけの功績を残しながら、なお「知る人ぞ知



小栗慰霊碑(高崎市倉渚町水沼「偉人小栗上野介罪なくして此所に切らる」とある)



小栗、ヴェルニー像(横須賀市ヴェルニー公園)

る」程度の位置づけに留まったのは、大政奉還、將軍の恭順にもかかわらず、倒幕という無理な政治的キャンペーンをもって正統性を確保した明治政府の出自と、それを^{おもんぶ}慮った歴史評価者の事なかれ主義のせいである。

さて、横須賀造船所の「弟分」のことにも忘れずに触れておきたい。群馬県太田市の金山城址^{みなみ}²³⁾の南曲輪^{くるわ}に中島知久平^{たかず}²⁴⁾氏の胸像が佇んでいる。富士重工の前身の中島飛行機の創設者である氏はこの地の出身である。中島飛行機は、1917年(大正6年)、横須賀海軍工廠出身で海軍機関大尉であった氏によって新田郡尾島町(現群馬県太田市)に設けられた飛行機研究所が原点。のちに同研究所は、日本飛

21) 小栗家にとって、「又一」という名前は特別である。その所以(ゆえん)は忠順から^さかのぼること8代の祖先小栗忠政が、武功に優れ、戦(いくさ)の度にいつも一番槍を果たしたことに依る。家康から「又も一番か。以後又一と名乗れ」と激賞され、以来当主はそれを誉(ほまれ)として「又一」を称するようになった。国子と結婚して小栗家を継いだ貞雄は、国子の母道子が没した後大正に入り東京豊島区の雑司ヶ谷霊園に小栗家の墓を建基している。上野介・道子夫妻 貞雄・国子夫妻の名が刻まれている。建基当時貞雄、国子夫妻はなお存命中であり、上野介のお骨も此処にはない(霊園管理事務所の係官談)。なお、霊園内の別区画には、上野介と同じ時期に太平洋を渡ったジョン万次郎こと中濱萬次郎も眠っている。

22) 「罪なくして切らる」との字句を彫った顕彰碑は、1934年(昭和7年)に漸くにして水沼河原に建立(こんりゅう)された。その字句が「お上が間違ったことをしたように受け取れる」と地元当局が難癖をつけて阻止しようとしたのを、地元有志と小栗の義理の甥である法学博士の蛭川新(にながわあらた)らが尽力して建立にこぎつけた。碑の文字は蛭川新の筆になるもの。

23) 金山城は、15世紀後半に新田氏一族の岩村家純によって築かれたもので、以後戦国大名の由良氏が依った。上杉謙信や武田勝頼などの攻撃を受けながら持ちこたえたが、後に小田原北条氏の支配下となり、秀吉の北条氏征伐により廃城となった。頂上の本丸跡には新田神社がある。日本100名城の一つ。

24) 中島知久平氏は、海軍技術将校として、水上飛行機を数多く手がけ、我が国の航空機産業に貢献したが、その後立憲政友会所属の代議士となった。豊富な資金力駆使して新官僚や軍部寄りの革新派を結集して勢力を伸ばし、分裂した政友会中島派の総裁に就任した。近衛内閣では鉄道相を務め、終戦直後の東久邇宮内閣で軍需相、軍需省廃止後は商工相を務めた。



雑司が谷霊園の小栗家の墓(背面)(東京都豊島区 のちに小栗貞雄が建基したもの)



中島知久平像（太田市 金山城）

行機製作所、中島飛行機製作所と名称変更を経て、1931年（昭和6年）に中島飛行機株式会社となった。ここで社の変遷を詳細に追うことはしないが、機体だけでなくエンジンメーカーとしては当時の我が国最大手であり、自社の九七式・一式戦闘機「隼」、四式戦闘機「疾風」だけでなく、三菱の零式艦上戦闘機（ゼロ戦）や川西の紫電改などのエンジンを手掛けたというだけで、その実力のほどの紹介は十分であろう。敗戦により、幾つかの会社に解体され、今やその栄光を知る人も少なくなったが、戦後すぐの時期、海外との技術提携に頼らず一定の独自技術で地歩を築けた自動車メーカーは、富士重工と、のちに日産と統合したプリンス自動車（旧富士精密工業）くらいであったことは特筆されてよい。

市内の富士重工の群馬製作所の正門前にある店で売っている最中は、自動車の格好をしてい



スバル最中（太田市 富士重工群馬製作所の正門前にある伊勢屋というお店で売っている。）

る。弟分らしく(?)小ぶりで、饅頭のような食感の「スバル最中」を頬張りながら、横須賀からの技術の系譜がここにも生きていること、そして小栗の縁で繋がっていることに、上州への不勉強の認識を改める思いとともに、格別の感慨を禁じ得なかった。

平和産業としてのシルク製糸場²⁵⁾、かたや軍事利用の影を払拭しきれない造船や航空機産業。江戸幕府体制とその遺産の否定をジャンピングボードにした明治政府や、戦前の体制否定から「平和国家」建設を標榜した戦後政府が、艦船や航空機の製造への評価に二の足を踏みたがる事情は分からないではない。

しかし、墨守か全否定か（オールオアナッシング）というような二者択一的なナイーブな発想で、爾後の立付にそぐわないものに正当な評価の目を向けないようでは、技術的にも思想的にも「本当の前進、飛躍」はない。

ただ、爾後に真相に接してみて悔い改め訂正しようにも、理不尽さがあまりに深く切なさが過ぎるとき、むしろ心が冷えるままに口籠ってしまう心情にも思いが至らないではない。権田村東善寺をあとにして帰京する道すがら、あれほど非業のうちに斃た士を好んだ司馬遼太郎が、遂に小栗上野介を書かなかった不思議さ²⁶⁾を少し分かったような気がした。

「以って瞑すべし」。これは信念に殉じて高みを成し遂げた者だけが抱ける「清廉な肯定」の気持ちである。彼の高い事蹟を想起するとき、個人に降りかかった不合理さを超えて、本人の最期に去来したであろう心持ちを示す表現として、これより他に言葉を知らない²⁷⁾。

25) 国産シルクは、のちに中国製の生糸に押されて民生需要が減退。戦時中はむしろ降下用パラシュートの素材として重宝がられたというのは、「平和産業」の皮肉な一面。

26) 司馬は自ら書いているように、幕末同時代の幕臣では勝麟太郎（海舟）に圧倒的なシンパシがある。幕閣にあっては、勝と小栗とは政敵であったとする説があるが、「流儀の異なるライバル」とでもいうのが適切であろう。諧謔（かいぎやく）とクソ真面目。両者のやり取りには、異なる流儀ゆえの格別の味がある。ただ、司馬にとっては、彼の大ヒーローである坂本竜馬や西郷隆盛との絡みでは、勝の役者ぶりが断然優ってみえるのであろう。小栗は、「街道をゆく」のようなエッセイ調の文を除いては、司馬の作品にほとんど取り上げられず、言及があっても「十一番目の志士」におけるそれのように端役的にしか登場しない。やはり小栗の功績の大きさとその死の事情を知れば知るほど、筆が凍りつき「明治という国家」の明るさを強調したい彼の趣旨に即さなかったからではなかろうか。

27) やや硬い表現ではあるが、小栗を評する明治の知識人の言葉がいくつか残っている。福沢諭吉は「鞠躬尽瘁（きっきゅうじんすい）、終に身を以てこれに殉じたるものなり」と述べ、福地桜痴は「精悍敏捷（せいこんびんしょう）にして多智多弁」としている。鞠躬尽瘁とは、国のために命を懸けて尽くしたとの意味である。蛇足ながら、「鞠躬尽瘁、精悍敏捷」の字句と小栗の肖像、横須賀製鉄所、ポーハタン号、更には米国海軍工廠から持ち帰った螺旋（ねじ）の写真を、イラストにして染め抜いたトートデニムバッグが販売されていることを、最近発見した。